

明けましておめでとうございます。

とはいえ、今年は、元旦から、たいへんな自然災害が生じてしまいました。能登地震で被害に遭われた皆様に、心からお見舞いを申し上げます。私は京都にいましたが、震度4の揺れを感じてテレビを付け、地震発生を知りました。その後頻繁に、あの熊本でも聞き慣れた忌まわしい警告音を聞くことになりました。能登地方は、数年来地震も多く、前の被害から復興する間もなく津波を含めた極めて甚大な被害を受けることとなり、7年前に大きな損害を受けた熊本に住む者としても本当に他人事とは思えません。私の生地新潟でも被害があったようで、小学6年生の時にあった「新潟地震」も思い出していました。あれは6月のこと、昼休みで学校にいましたが、みんなで走って避難した校庭の地面から、液状化現象で水がボコボコを湧いてきて、このまま地底に落ち込むのではないかと本当に怖かったことを覚えています。今回も同じ事が起こったようでした。家に集団下校で帰ると、ブラウン管テレビが転がり、ふすまは梁が曲がって閉まらなくなり、余震が怖くて、隣近所で七輪を持ち寄り外で煮炊きしていました。この気候ですから、能登の地では、頻繁の余震を、避難所やご自宅などでどう凌いでおられるのかと本当に心配になります。今は手出しもできませんが、医療者として私たちができることは何かと常に意識しながら情勢を見守りたいと思います。

今年、2024年は、熊本労災病院にとっても節目の年になりそうです。労働災害対応のために創設され、診療が開始されてから70年を経た歴史ある基幹病院として、さらに新しい歴史を刻もうとしています。まず、新たな、「高度医療・災害対応棟」が、着工します。資材急騰による建設費用の増加や人手不足もあり、また、遺跡の調査や、土壌調査をしたりでの遅れも懸念しながらも、一刻も早く工事を開始したいと思います。さらに、秋からは歯科口腔外科の診療も始まります。県南で唯一の入院病床を持つこの診療科の設置は地域医療に大きく寄与するものと信じ、大学医局の全面的なご支援もいただきながら、ハードやソフト(歯科衛生士の雇用など)の準備を進めています。

ただ、昨年より皆様にお知らせしておりますように、残念ながら、産科での分娩取り扱い継続の見通しが立ちません。大学医局からの医師派遣停止がその原因ですが、お隣の熊本総合病院に新たに産科が設置され、新年からその取り扱いが始まっています。最も優先すべきは、地域の妊婦さんに安全にお産をしていただく事です。助産師や小児科医などの人的資源や、50年の歴史をもつ分娩機能などのハードも充実している当院が、八代地域の周産期拠点となり得ず、大学医局の方針として熊本総合病院にその機能が置かれることには当院職員を代表して遺憾の意を示したいところですが、すでに方向性が決したことだから、との医局の御指示は絶対であり、当院としても、その方針には肅々と従わざるを得ません。それでも、産科医療が今後も継続できるよう、あきらめずに医師の雇用努力は続けたいと思います。たとえ、それが叶わなくても、一人残る常勤産婦人科専門医・副院長の福松先生による婦人科診療や、助産師

さんたちが中心となつての産後ケアなどの医療は、病院をあげて支援しながら組織的に継続する所存です。

現時点では、2024年、その他の診療機能には変化はない見込みです。すでに報道の通り、今後、八代地域の人口減少、高齢化は避け得ない事実であり、今後数十年以内には地域の医療体制全般の見直しも必要となりましょう。しかし今は、私たちが目指している、断らない救急、患者様第一の温かい医療、の継続をはじめ、勤労者医療にとどまらない、地域の基幹病院としての矜持は持ち続けねばならないと思います。

職員一同、伝統に培われた誇りと新たな挑戦の気持ちをもって診療に邁進いたします。本年も、熊本労災病院へのご指導、ご支援、御協力のほど、よろしくお願い申し上げます。